

報告

I-LISS 国際大会のプログラムの分析 － 韓国国際大会 －

山田美雪
(兵庫県立大学)

Analysis of the Program of the 5th I-LISS International Conference in Korea 2022

By Miyuki YAMADA
(University of Hyogo)

2022 年 12 月 10 日相愛大学南港キャンパスで I-LISS 日本支部総会及び研究大会が開かれ、そこで同年 10 月に韓国大邱で開催された I-LISS 研究大会の Proceeding の紹介と、その一週間前に開催されたインドでの開催された同じ I-LISS 研究大会の比較研究を発表した。今回はこの発表資料を掲載する。この 2 つの I-LISS の研究大会の参加人数や大会テーマは異なっていたが、情報学関係の発表が多かったことは共通していた。世界はこの 3 年のコロナ禍を経て AI の活用や、オンラインサービス、キャッシュレス化が一気に進んだ。日本国内の公共図書館では電子書籍やセルフ貸出返却機器の導入が進み、様々なイベントがオンラインで開催された。大学図書館ではオンライン授業に対応するために電子資料の導入が一気に加速された。さらに国立国会図書館ではデジタル化資料送信サービスが個人でも利用できるようになり、わざわざ図書館に行かなくても自宅で図書館サービスが手軽に享受できる時代になってきている。そういった状況の中で図書館は今後どのような方向に進めばよいのか。おそらく明確な答えがだせる段階にはまだ至っていないのが現状ではないかと思われる。そういう意味でも、今回は他国の図書館情報学の研究者達がどのような方向性を探っているのかを知るにはよい機会となったのではないかと思われる。

I-LISS 国際大会のプログラムの分析

－ 韓国国際大会－

I-LISS Japan Chapter 研究大会
2022年12月10日(土)
相愛大学

山田美雪

本日の発表の構成

1. 大会の概要
2. 内容及び分析
3. 結論
4. その他（考察）
5. まとめ

* インドの研究大会との類似点・相違点など

1 大会の概要

- 名称 I-LISS 第5回国際大会 (韓国)
- 場所 慶北大学校、大邱市、韓国
- 日時 2022年10月21～22日
- 新型コロナの影響で延期になった2020年度第4回大会 (インド) が去年開催され、2021年 (第5回) が韓国、2022年 (第6回) がインドでそれぞれ2022年10月に開催された。
- 対面 + ZOOM のハイブリッド方式

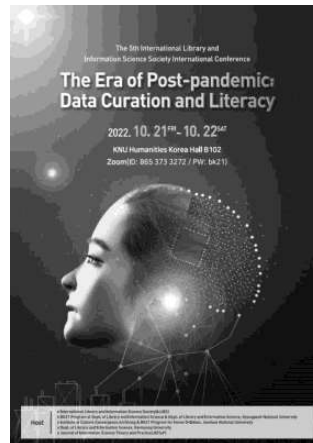
1

1.1 大会テーマ

”the Era of Post-pandemic:
Data Curation and Literacy”¹⁾

(和訳)

パンデミック後の時代: データのキュレーションとリテラシー



2

1.2 構成

- 初日 基調講演1 + 発表15
5つ毎に1セッションに纏め、休憩や
ディスカッションを挟んだ3セッ
ションの構成
- 2日目 全体討議
- 参加はホスト国の韓国が最多の5、タイと
フィリピンが3、チェコ・日本・ベトナム・
インド・アメリカ（基調講演）が各1

3

2. 内容及び分析

- I-LISS Japanから志保田務, 孫誌銓, 山田が参加
”A Study on Acceptance and Adaptation of
S.R.Ranganathan’ Theory in Japan”を孫先生
が現地で発表。他2名はZOOMで参加した。

4

2.1 開会の挨拶

- ・「今日のデータドリブン社会においては、良質なデータを発見し効果的に活用することは、競争優位性を確保するための重要な要素（中略）この大会は図書館情報学の見地からのデータキュレーション及び研究と実践の能力の現状を学ぶことにある。どのタイプのデータがマネジメントの価値があり、社会的な問題を解決し、社会の発展を促進する手助けになるかについて議論したい。」

→図書館情報学からデータキュレーションの研究を検証する？

5

2.2 基調講演

- ・「データ引用に関する現在の課題」

ディートマー・ウォルフラム教授

データのシェアと再利用にはデータサイテーションが重要。データサイテーションは現在のメジャーなものとしてはインデックス（Web of Science, Scopusなど）があり、いくつかのジャーナルには新しい「データとソフトの有効性」がみられる。

→オープンサイエンス、オープンデータなど大学図書館関係者にとってはIR（機関リポジトリ）等によく聞く内容

6

2.3 個別発表

- 発表は、大会のテーマ (Post-pandemic = New Normal, Curation, Literacy, Data, Digital)に沿ったものが多かった。

(例)

- 「ニューノーマルにおける図書館利用者の知識、利用度、テクノロジードリブン」
- 「チャットボットを超える学術図書館の仮想レファレンス・サービスの設計、認識、および適応」

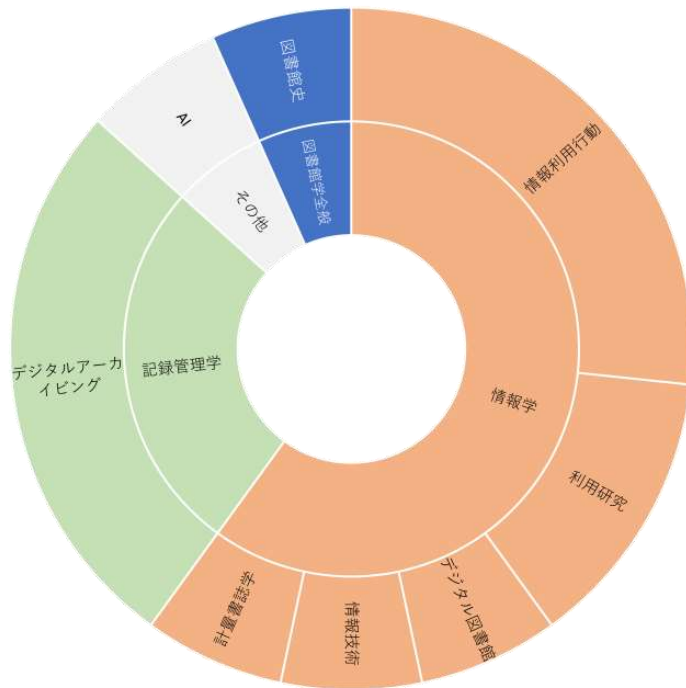
7

- 岡田先生発表で使われた分類表を用いてインドと韓国の発表分野を分類

(発表論文 分類別)				
大分類	韓国		インド	
	本数	割合 (%)	本数	割合 (%)
図書館学全般	1	6.7	21	16.1
図書館運営	0	0.0	5	3.8
図書館サービス	0	0.0	9	6.9
蔵書構築 (管理) 全般	0	0.0	6	4.6
資料組織	0	0.0	1	0.9
記録管理学	4	26.6	1	0.9
情報学	9	60.0	69	53.0
その他	1	6.7	18	13.8
合計	15	100.0	130	100.0

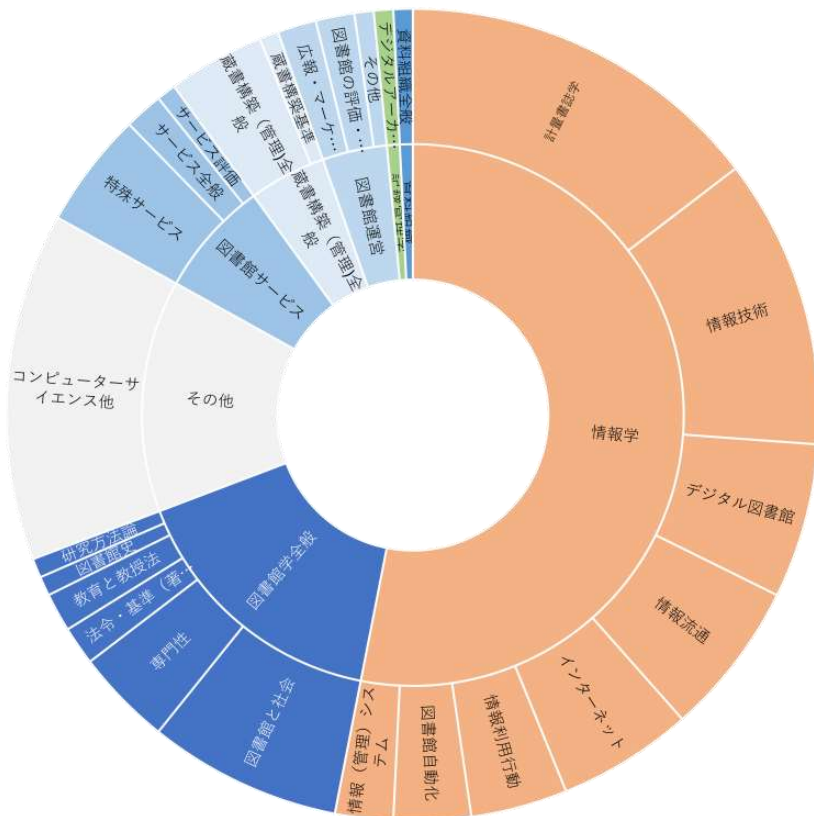
8

韓国発表分類



9

インド発表分類



10

3 結論

- 情報学 =9 (60.0%)
- アーカイブ =4 (26.6%)
- 図書館史 =1 (6.7%)
- その他 =1 (6.7%)

→ インドの大会より更に分野が絞られ、情報系に特化している。

デジタルデータのマネジメントをどうするか？を論じたものが多い。

(例) 「公共機関データの記録管理・情報サービス手法に関する研究」

11

4 その他（考察）

- 直球のLibrary関係の発表は、日本のランガナタンの発表のみ。
- 図書館情報学の研究大会ではあるが「図書館」の必然性是一部を除き、それほど高く感じられなかった。

(例)

「アイトラッキングメタデータに基づく理解度予測によるパーソナライズド情報検索」

「AMULETのためのメタデータスキーマの開発」

12

4.1 館種別

- 大学図書館が5
 - 国立研究所（専門図書館）が2
 - 行政機関（公文書）が1
 - 図書館とは無関係が7
-
- 大学図書館は発表者の国のトップクラスの大学が多い。

13

4.2 コンテンツ中に多かった単語

- キーワード以外では、データキュレーション（Data Curation）という単語がよく見られた。
（例）「データキュレーションの観点から見た OSINT の特徴」
- DXを実現させるのに必要不可欠だが、日本の図書館においては、一部を除きあまり聞かれない。

14

4.3 発表者について

- 15の発表のうち単独発表が4、共同発表が11
- 発表者は第1著者に限ると学生（院生）8、大学教員5、その他（研究員等）が2

→「院生をメインとした若手研究者の研究発表」との印象が強い。

15

4.4 その他

- 今回、小中学校の教育現場の発表がなかったので、学校図書館の状況は窺えなかった。
- Proceeding は去年の第4回インド大会³⁾のものよりはだいぶましになっている。
- 書式があまり細かく指定されていないこともあり、タイプミスやフォーマットのばらつきが散見された。

16

5 まとめ

- 大会テーマのキーワードに縛られた感は否めないが、それでもインドの大会の方がまだ「図書館」の要素が色々に残っている。
- 日本の若手の研究者も、参加して発表してほしい。
- そのためには是非、若手の図書館関係者の入会をお願いしたい。

17

ご清聴ありがとうございました

18

参考文献

- 1) the Era of Post-pandemic: Data Curation and Literacy, (The 5th International Library and Science Society International Conference) Kyungpook National University, Daegu, South Korea, 2022
- 2) 池内有為「データキュレーターの役割と日本における人材育成の願望」『情報の科学と技術』72巻5号, 2022, 170p.
- 3) Transition or Transformation of Libraries due to Covid Pandemic: Lessons to Learn (Proceedings of the 4th I-LISS International Conference -IIC 2021) Chennai, India, 2021

参考文献

- 4) 白才恩、徐有珍「日本と韓国における図書館情報学研究者の研究主題の比較分析：2000～2014年度の博士学位論文を対象に」『Library and Information Science』77, 2017, p.27-50.